

練習問題

一次のにの文法的説明をしなさい。

① 残りなく戦に出でて、みな死にけり。(訳:一人残らず戦に出て、みな死んでしまった。)

↓
には「死」に続いている。

↓
このには、**ナ行変格活用動詞「死ぬ」の連用形**

② 雨に向かひて月を恋ひ、……(訳:雨を前にして、月を慕い、……)

↓
にの直前「雨」は体言(名詞)。

↓
後に「あり」「さぶらふ」「侍り」等の動詞がない。

↓
このには、**格助詞「に」(動作・作用の対象)**

③ この枝、かの枝散りにけり。(訳:この枝も、あの枝も(花は)散ってしまった。)

↓
にの直前の「散り」はう行四段活用「散る」の連用形。にの直後に過去の助動詞「けり」。

↓
このには、**完了の助動詞「ぬ」の連用形**

④ なほあはれに情け深し。(訳:やはり感銘があり、深い情趣がある。)

↓
にの直前の「あはれ」は一見すると体言(名詞)に見えなくもないが、これに「いと」(とても)をつけても「とてもしみじみと心動かされる」となり、不自然ではない。

↓
このには、**ナリ活用形容動詞「あはれなり」の連用形**

⑤ 涙落つともおぼえぬに枕浮くばかりになりけり。

(訳:涙が落ちると思われないのに、枕が浮くほどになってしまったよ。)

↓
にの直前の「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形。

↓
にの下に「あり」「さぶらふ」「侍り」などがないので断定の助動詞「なり」ではない。

↓
連体形「ぬ」との間に体言「ところ、とき」を補うと「思われないところ、枕が」となり不自然であるため、格助詞ではない。

↓
「けれども」「ので」などと訳することができる。

↓
このには、**接続助詞「に」**

※枕が浮く 涙がたくさんたまって枕が浮き上がるほどになるということ。

⑥ ことに かたくななる人ぞ、…… (訳: とくに無風流な人に限って、……)

↓ に の直前の「こと」だけでは意味がない。

↓ このには、**副詞「ことに」(とくに)の一部**

⑦ かの薄^{すすき}の事習ひに、…… (訳: その薄のことを習うために、……)

↓ に の直前「習ひ」は八行四段活用「習ふ」の連用形。

↓ 動作の目的「うために」と訳して不自然でない。

↓ 後に過去・完了の助動詞がない。

↓ このには、**格助詞「に」(動作の目的)**

⑧ これは龍の仕業^{しわざ}にこそありけれ。 (訳: これは竜のしわざにちがいない。)

↓ に の直前の「仕業」は体言(名詞)。に の後に「あり」を伴っている。

↓ に の直前の「仕業」に「いと」(とても)をつけると「とてもしわざ」となり不自然であるため、形容動詞ではない。

↓ このには、**断定の助動詞「なり」の連用形**

二次の①～⑧のにの文法的説明として適当なものを語群のA～キより選び、記号で答えなさい。

① たけき者も遂には減びぬ、ひとへに 風の前塵に同じ。 **キ**

勢い盛んな者も最後には減びてしまう、まったく風の前塵と同じだ。

ひとへに ↓ 副詞

② この吹く風は良き方の風なり。悪しき方の風にはあらず。 **エ**

この吹く風は良い方向の風である。悪い方向の風ではない。

体言に接続。「に」と「あり」の間に係助詞「は」が入り、「あり」の下に打消の助動詞「ず」がついた形。

③ もろこし **に** 朴叟という翁たりけり。 **ア**

中国に朴叟という翁がいた。
体言接続。ゝにと訳せる

④ この馬、同じさまなる馬を、あまた具して来 **に** けり。 **ウ**

この馬は、同じような馬を、たくさん連れてやって来た。
連用形「来」に接続。「にけり」の形からも識別可能。

⑤ 京のならひ、何わざにつけてもみなもとは田舎をこそ頼める **に**、絶えて上るものなければ、 **イ**

京のならひで、何事につけ送られてくる元は田舎を頼みにしているのに、まったく京に上るものがないので、

「頼め」は四段活用已然形。「る」は存続の助動詞「り」の連体形。「ゝのに」と訳せる

⑥ この人を具して去 **に** けり。 **オ**

この人を連れて立ち去った。

「にけり」のかたちだが、直前の「去」はナ変の「去ぬ」の語幹

⑦ はなやか **に** うれしげなるこそ、またあはれなれ。 **カ**

にぎやかでうれしそうなこそ、また、趣深い。

はなやかなりの一部

⑧ 「東の方に住むべき国求め **に**。」とて行きけり。 **ア**

「東の国の方に住めそうな国を探すために。」と思って行った。

「求め」はマ行下二段活用連用形。「に」は、「ゝために」と訳せる。

三次の①～③の傍線部を ① の文法的意味に注意して口語訳しなさい。

① 男、宮仕へしにとて、別れ惜しみて行きにけるままに、

男は、**宮仕えをするためにと言って**、女に別れを惜しんで行ってしまったまま、

・「に」の直前の「し」はサ変動詞「す」の連用形。

・完了の助動詞の場合は「に・き」「に・けり」のパターンででる。

・格助詞の場合は「…ために」と訳すことができる。

↓この「に」は格助詞の「に」

② 男、異心ありてかかるにやあらむと思ひ疑ひて、

男は、(妻が)別の男に心寄せて**このよう**(快く自分を送り出す)**であるのだろうか**と思ひ疑って、

③ 十月つごもりなるに、紅葉散らで盛りなり。

十月の末であるのに、紅葉は散らないで盛りである。

・「に」の直前の「なる」はう行四段活用 of 連体形。

・格助詞の場合は、直前に「とき」「ところ」などの体言が補える。

・断定の助動詞の場合は、下に「あり」「侍り」「候ふ」などがくる。

・接続助詞の場合は、下に体言を補えず、逆説や順接の意味で下に続く。

↓ ②の「に」は断定の助動詞

↓ ③の「に」は接続助詞(逆説)

